

歌 舞 伎 歳 時 記

1967年卒 小泉芝雲

はじめに

歌舞伎の出し物（狂言）は、ご存じのように季節性を重んじ、狂言名、舞台装置、音楽等にもその工夫が施されており、例えば狂言名でその芝居の季節が解るくらいです。

しかし最近毎月上演される狂言を見ていると、あまりにも季節に合っていないような気がします。これは良い意味では、劇場の冷暖房設備が優れていることによるのでしょうか、それ以上に商業主義に徹した狂言決定がなされているものではないかと思われまます。

やはりもっと季節性を重んじ毎月の狂言を考えたほうが良いような気が致します。

私は最近少しばかり俳句を詠む事もあり、その感が特にするのかもしれませんが。

今年の初め俳句仲間に歌舞伎を知ってもらいたいと思い、この一年間に渡り句会誌に「歌舞伎歳時記」と題し、歌舞伎の行事や狂言を中心にその季節性につき簡単に書いてみました。これはその時の内容を基に、若干補足したものです。

俳句は季語を大切に考えており、その中にはしっかりと歌舞伎に関係の深い言葉が季語として使われております。

例えば、初芝居（新年）、弥生芝居（春）、夏芝居（夏）、盆芝居（秋）、そして顔見世（冬）等はよく知られた季語です。其の俳句の五つの季節に合わせて歌舞伎の主なる狂言名を揚げてみます。

新 年

先ず新年、つまり正月に上演される初芝居興行を見てみます。今日初芝居を上演しているのは東京の歌舞伎座、新橋演舞場、浅草公会堂、国立劇場の四座と、大阪松竹座、京都南座の六座であり、正月二日（国立劇場は三日）が初日幕開けです。

正月の各劇場は玄関前に門松を立て、大間には飾り海老付の鏡餅、壁には役者絵模様の大凧、大羽子板、更には紅白の繭玉が飾られて当に正月気分を煽っています。

又松の内は、特に和服に着飾った女性客や、劇場に出演の役者の奥様方で一段と華やぎ、初芝居の雰囲気醸し出しています。

狂言は華やかなものが多く、初曾我という季語がある如く『曾我物』は必ず上演されます。例えば一番上演回数が多い『寿曾我対面』は、曾我兄弟が本望の敵討ちを遂げるための端緒をつかむという処に御目出度い予祝性を示す祝言物として、正月の寿狂言となっています。他にはご存じ成田屋歌舞伎十八番の『矢の根』『助六』等があります。（「助六」は春に詳細説明）

『矢の根』の曾我五郎は、車鬢、二本隈、化粧襷、黒地に蝶の模様（蝶は五郎のシンボルマーク）の厚綿の着付けで、肌を脱いで赤の襦袢で炬燵檣に腰掛け、身の丈ほどある矢の鏃を研いでいます。この姿は砥師の正月の砥初めの儀式の姿から工夫されたものと言われてしています。その五郎が、呪力を持った矢の言い立てを語り、正月の食膳（おせち料理）のつらねを披露するのです。

「虎とみて、石に田作り柿臈、矢立の酔ごぼう、煮凝り大根、一寸の鮎に昆布の魂」といった調子です。そして東西南北を睨み、柱巻の見得、元禄見得と荒事の基本的な見得を披露し、最後は裸馬にまたがり、大根を鞭にして仇の工藤館に向かって花道を引っ込むのです。（「成田屋一」の掛け声）

因みに下手な役者のことを「大根役者」と言いますが、この五郎に大根を持たせたのは洒落なのでしょうか。

曾我の五郎は「荒事」で、市川團十郎のつまり「成田屋」の芸であり、團十郎を見て正月を迎えた気分になり、團十郎の睨みで厄払いが出来るという江戸信仰の名残があるのでしょう。

成田屋の睨みを奉ず江戸の春

佳田翡翠

成田屋の睨み千両初芝居

小泉芝雲

御目出度いと言えば天下泰平、五穀豊穰を祈る舞踊の『三番叟物』で、『舌出し三番叟』『操り三番叟』、『二人三番叟』等が先ず幕開けに演じられます。

幕開きの淑気みなぎる三番叟

佳田翡翠

そして舞踊としては一月十一日の鏡開きに因む『春興鏡獅子』、親子で踊る『連獅子』が演じられます。この二つの舞踊は亡き十八世中村勘三郎とその息子（勘九郎・七之助兄弟）が当たり芸としていたもので、勘三郎が祖父（六代目菊五郎）から父（十七世勘三郎）を経て継がれてきた演目です。

尚、初芝居が役者の襲名興行等となると、その役者の当たり狂言が加わり一段と豪華な舞台となります。例えば平成十年の十五代目片岡仁左衛門襲名、平成二十年の歌舞伎座百二十年記念では『助六』が上演されました。

又、平成二十七年の初芝居では、大阪松竹座で坂田藤十郎（元三代目中村鴈治郎）の長男中村翫雀が、浪速の顔である中村鴈治郎を四代目として襲名する興業が久方振りに上方役者（松嶋屋一門等）勢揃いのもと執り行われます。四代目はお家芸である玩辞楼十二曲のうち『廓文章』の藤屋伊左衛門、『封印切』の亀屋忠兵衛を演じることとなっています。

きっと「成駒屋」とか「鴈治郎は一ん」の大向こうが掛るのではないのでしょうか。

初芝居見て来て晴着いまだ脱がず

子規

助六の啖呵響くや初芝居

小泉芝雲

春

さて春の芝居ですが、春は花に所縁の深い芝居が多いようです。

先ず梅というと、黙阿弥作の『三人吉三廓初買』。節分の夜梅が咲き始めた大川端で、紅白梅模様の振り袖姿に変装したお嬢吉三が「月も朧に白魚の 篝も霞む春の空、一こいつア、春から縁起がいいわエー」と名台詞を唄い揚げますが、これを聞くと春が近いことを感じます。

振り袖の足に杭踏む朧月

佐藤吉之輔

更に世話物では三分咲きの紅梅が美しい舞台上で若いお染、久松とお光との悲恋物語が演じられる『新版歌祭文・野崎村』、時代物では『菅原伝授手習鑑』等があります。

『菅原伝授』は、菅原道真公とその家来に当たる三つ子の兄弟梅王丸・松王丸・桜丸を絡ませた芝居で、中でも頻繁に演じられるのが「車引」、「寺子屋」です。主役の菅原道真を当たり役としたのは、十三世片岡仁左衛門とその息子十五代目仁左衛門です。

歌舞伎座に梅東風吹きて仁左衛門

小泉芝雲

三月ともなれば舞台に櫻の釣り枝が飾られ、多くの「弥生狂言」が演じられます。

先ずは外題に「櫻」の文字が織り込まれた『義経千本櫻』、『助六所縁江戸櫻』、『櫻姫東文章』があり、更にお家騒動を題材とした『鏡山旧錦絵』、『伽羅先代萩』や坂田藤十郎の当たり狂言（お初を千三百回以上勤める）『曾根崎心中』、そして花の吉原を舞台にした『籠釣瓶・見初めの場』、『鞆当』、大泥棒石川五右衛門の「絶景かな、絶景かな」の台詞で有名な『金門五山桐』等があります。

『義経千本櫻』は、義経の名前が付いてるものの、実際芝居で活躍する人物は平家の落武者平知盛（渡海屋・碓知盛の段）、いがみの源太（鮎屋の段）、狐忠信（吉野山・四の切の段）です。

この芝居は全五段ですが、上演回数が多いのは狐忠信が活躍する「吉野山」と宙乗り（二代目猿翁

の演出)が見せ場である「四の切」です。

「吉野山」は、義経の愛妾静が形見の「初音の鼓」を持って、忠信と共に、別れた義経を慕い訪ねる櫻咲く吉野山への道行舞踊劇。この忠信実は初音の鼓の革に張られた狐の子供の化身であるという幻想的な物語です。静と忠信の道行における「女雛・男雛」の立ち姿の見得が美しく、人気役者(例えば玉三郎と海老蔵)が演じると、思わず「御兩人」と大向こうが掛る名場面です。

私は、深沢先生が描かれた句誌「深吉野」の表紙絵を見る度にこの芝居舞台が目には浮かぶのです。

道行や女雛男雛の静・忠信

小泉芝雲

忠信は狐なりける夕桜

鈴木鼓打

前述した「吉野山」に対し「吉野川」という芝居も有り、これは本外題を『妹背山婦女庭訓』と言い、その三段目に当る芝居です。この芝居は吉野川を隔てて不和の関係にある紀伊の国背山の領主と大和の国妹山の領主の其々の息子久我之助と姫の雛鳥との悲恋物語で、和製「ロミオとジュリエット」版と言われています。両花道を使い客席を吉野川に見立てた演出となっている名作です。

以上のような浮き浮きした弥生芝居の気分を詠んだ一句。

何を着て行かむ三月狂言に

森田 峠

櫻に因んだ芝居では、歌舞伎十八番『助六所縁江戸桜』が極め付きです。

花の吉原での伊達男花川戸助六(実は曾我五郎)とその恋人揚巻の痛快で華やかな舞台です。

先ず助六が江戸紫の鉢巻に黒羽二重の着付けに赤い襦袢、柑子色という黄色い足袋に桐柱の下駄、花の雨を避ける蛇の目傘、全てを粹に決めて花道に現れる。所謂「助六の出端」です。

此の助六にぞっこんなのが花魁の最高位「松の位の太夫」の揚巻。其の扮装は五節句をモチーフにした打掛と俵板帯、頭は立兵庫と呼ぶ遊女最高位の鬘、三枚歯の下駄で、かむろ、新造、等二十人近くを従え、「花魁道中」を繰り広げ、其の後に胸のすくような揚巻の悪態の初音や、助六の啖呵が聞かれるのです。團十郎の助六、玉三郎の揚巻の舞台が印象に残っています。

最近では平成二五年六月の新歌舞伎座の柿茸落公演で海老蔵が父親の代役(團十郎が二月に死去)として演じています。

花の雨蛇の目に受けて團十郎

小泉芝雲

この他に、櫻が「無常」を表すように咲いている陣屋を舞台とした『一谷嫩軍記・熊谷陣屋』があります。この芝居最後の花道の引き込みで、主役の熊谷直実が、義経の命に従い敦盛の身代りに我が子を犠牲にしたことで、人生の無常を悟り僧となって「十六年は一昔、夢だ、夢だ一」と去っていく時の哀れな姿が印象的で、この役は中村吉右衛門が当たり役としています。

十六年夢よと被る花の笠

佐藤吉之輔

そして皆様ご存じ黙阿弥作の『弁天娘女男白浪』です。弁天小僧と言え、すぐに「知らザア言っ、聞かせやしょう」の台詞が浮かんできます。この芝居もよく上演されるのは「浜松屋の場」と「稲瀬川勢揃いの場」です。弁天小僧は尾上菊五郎・菊之助親子の所謂「音羽屋」のお家芸であり、今年の二月には菊之助が時分の花の如きに演じていました。

春灯を睨む啖呵の嶋田鬣

佐藤吉之輔

春に因んだ舞踊としては、道成寺物があります。

道成寺は、安珍・清姫の伝説を中心的な筋立てとした能の『道成寺』を舞踊化したもので、一番有名なのは『京鹿子娘道成寺』です。この踊りには当に今を盛りと咲く華やかな桜花が似合い、その中で桜柄の模様の衣装を纏った白拍子花子が舞うのです。今日まで多くの役者がこの白拍子花子に挑み、それぞれの魅力ある花を競ってきましたが、今日では玉三郎が一番でしょう。

鐘供養ありて紀伊路の花の雲

水原秋桜子

そしてもう一つ有名な舞踊に『藤娘』があります。この踊り元々は五変化舞踊であったのですが

「藤娘」のみが独立し、歌舞伎舞踊として上演されてます。大きな松の木に絡んだ藤が一面に咲き揃っていて、幕が開くと舞台がパット明るくなり、其処に黒塗りの笠を冠り藤の枝を担いだ藤娘が立っています。この演出は六代目菊五郎が完成させたもので、その指導を直接受けた七世尾上梅幸（菊五郎の父）が当たり役としていました。

以上の通り春の芝居には多くの花に因む芝居がたくさんあり、楽しむことが出来ます。

夏

五月と言えば歌舞伎では「團菊祭」です。これは明治三六年に没した劇聖九代目團十郎と五代目菊五郎の偉業を顕彰し、その面影を偲ぶため昭和十一年に始まったもので、一時中断は有ったものの今日まで毎年五月に開催されています。出し物としては二人の当たり役が多く、例えば歌舞伎十八番の『勸進帳』、曾我物（旧暦五月二十八日は曾我祭）である『外郎売』、『矢の根』や、黙阿弥作の世話物『髪結新三』（初鰹売りの声が舞台に聴かれる）、『魚屋宗五郎』そして舞踊『藤娘』等が演じられてきました。因みに今年は昨年二月に亡くなった十二世團十郎の「一年祭」として、その長男である十一代目海老蔵と七代目菊五郎・菊之助親子が中心となり『勸進帳』（弁慶：海老蔵、富樫：菊之助）『幡随院長兵衛』（長兵衛：海老蔵、水野：菊五郎）『鏡獅子』（菊之助）等が演じられました。特に未来の團十郎・菊五郎の「山伏問答」は見ごたえ、聴きごたえがありました。

街薄暑團菊祭の開くを待つ

青木政江

六月は、あやめ、杜若に絡ませ『御所五郎蔵』の「時鳥殺し場」、南北作の『杜若艶佐野八幡』や『あやめ浴衣』の艶やかな舞踊が上演されます。更に皆様ご存じの『仮名手本忠臣蔵』の五、六段目のおかる・勘平の悲劇もこの時節（旧暦六月二十九、三十日の頃）の芝居です。

梅雨の闇五十両とのひと科白

小泉芝雲

梅雨空に廻る因果や縞財布

小泉芝雲

そして本格的な夏を迎え、季語にある「夏芝居」が上演されます。

最近の歌舞伎座においては昭和四十六年七月に三代目猿之助（現二代目猿翁）が古典の新演出（宙乗り、早替り、本水使用等）を取り入れ『義経千本櫻・四の切』や『伊達の十役』を、また新作物として『ヤマトタケル』『オグリ』『三国志』等を上演し好評を得て所謂「スーパー歌舞伎」を確立しました。八月に於いては「納涼歌舞伎」と称し、平成二年から当時若手であった勘九郎（十八世勘三郎）と十代目三津五郎が中心となり若手による大歌舞伎、更には串田和美、野田秀樹等の演出による新作歌舞伎に挑戦し若い歌舞伎ファンを興奮させ支持を得てきました。

例えば大歌舞伎では古典の『夏祭浪花鑑』『天竺徳兵衛』『南総里見八犬伝』、怪談物の『四谷怪談』『乳房榎』（今年八月勘九郎にて上演）『牡丹燈籠』等、更に新作では野田秀樹演出の『研辰の討たれ』『鼠小僧』『愛陀姫』等があります。

殺し場は本雨降らし夏芝居

杵屋佐平次

幽霊より人が怖きや夏芝居

小泉芝雲

その他に夏芝居としては、近松門左衛門が描く家庭内暴力の『女殺油地獄』（仁左衛門の当たり芸ですが、現在は愛之助や染五郎も演じています。）、芸者衆の団扇が活躍する『伊勢音頭恋寝刃』、そして「死んだと思ったお富とは、釈迦様でも気がつくめえー」の名台詞で有名な『源氏店』があり、更にお祭りを題材とした池田大伍の『名月八幡祭』（六月に吉右衛門にて上演）そして舞踊では『三社祭』や山王祭を題材にした『お祭り』など。そして幻想風の舞踊劇『かさね』がよく人気役者により上演されます。

今は昔と違って冷暖房設備が整ったことで夏芝居の内容も変わってきており、快適な劇場で芝居という「真夏の夜の夢」を楽しむことが出来るのです。

夏芝居兄弟で舞ふ三社祭
怪談も少し混じりて夏芝居
筋書を知っておりても夏芝居

金子八重子
能村登四郎
稲畑汀子

秋

秋の歌舞伎関連季語としては、「盆狂言」、「地芝居」（村芝居）程度であり、しかも「盆狂言」（盆の頃興業される歌舞伎）は今日では夏芝居（納涼歌舞伎）となっているのが実態です。

しかし秋の季節は、芸術の秋に相応しいしんみりとした重みのある狂言が数多く上演されます。九月には、「秀山祭」（六代目菊五郎と共に「菊吉時代」を築いた初代中村吉右衛門を偲び、平成十八年より実施）が開催され、同丈の当たり狂言（主に義太夫もの）の中に秋に相応しい『籠釣瓶街酔醒・縁切りの場』（次郎左衛門の「秋の夜長を待ちかねて菊見がてらに来てみれば——」の名台詞）、『引窓』（中秋の名月、放生会の時節の話）『俊寛』（「思い切っても凡夫心——」の名台詞）『菊畑』（舞台一杯に菊の花）、『伽羅先代萩・御殿の場』（仙台藩の御家騒動の芝居）等があります。

秋狂言隣へ廻す茶碗酒

火村卓造

俊寛に九月歌舞伎の波幾重

細川玲子

因みに初代吉右衛門（俳号・秀山）は、俳句に通じ虚子の門下生で「ホトトギス」の同人として、多くの名句を残し、又その血は孫の現九代目松本幸四郎（俳号・錦升）に引き継がれています。

秋の蚊を追へぬ形の仁木かな

中村吉右衛門（秀山）

紺碧の大天空へ曼珠沙華

松本幸四郎（錦升）

はるかまで続く道あり秋夕焼

松本幸四郎（錦升）

十月に入ると文化省主催による「芸術祭」が始まり、早々に「顔見世」のキャッチフレーズの下に、御園座は十月、歌舞伎座が十一月に各役者の襲名や追善を絡ませた本格的な秋狂言を上演します。（本来「顔見世」興行は十二月の南座公演であり、冬の季語であるので次回に説明）

最近では平成二十五年十月に歌舞伎座にて菊五郎、吉右衛門、仁左衛門等による通し狂言『義経千本櫻』が芸術祭参加作品として上演され、秋に相応しい「椎の木の間」「すし屋の間」（仁左衛門のいがみ源太）の演出が高く評価され芸術祭の大賞を受賞しています。

維盛が酔桶になふ葛の花

水原秋桜子

此の十、十一月に上演される狂言としては、顔見世には欠かせない歌舞伎十八番物『暫』、『勧進帳』（弁慶・富樫の組み合わせ）はじめ『仮名手本忠臣蔵・七段目』（由良之助・おかる・平右衛門の組み合わせ）、生締め物である『実盛物語』、『盛綱陣屋』、『本朝廿四孝・十種香』（誰が八重垣姫を）の時代物や、世話物である『魚屋宗五郎』（九月の芝神明の祭を舞台にして宗五郎がどのような酔態の演技をするか）、『河内山』（誰が「悪に強きは善にもと一」の河内山の名啖呵を切るか）、新作物では岡本綺堂作『修禅寺物語』、大仏次郎作の『若き日の信長』（柿喰う信長・團十郎の当り役）、長谷川伸作の『一本刀土俵入・序幕』等があります。

特に今日まで一番上演回数が多く、「又かの関」とも言われている『勧進帳』について触れておきます。この舞踊劇は筋がはっきりしており、上演時間も一時間ちょっとで、伴奏の長唄音楽も良いのか、日本人ばかりでなく外国公演でも人気が高いのです。私も今日までいろんな役者の『勧進帳』の弁慶を観てきました。古くは十一代世團十郎から最近では七代目染五郎の初弁慶まで。現存の弁慶役者では幸四郎、仁左衛門、吉右衛門、猿翁、段四郎、三津五郎、松緑、海老蔵、橋之助、愛之助、そして染五郎。

嬉しいことは同じ弁慶でも生涯千六百回以上弁慶を演じた七代目松本幸四郎の血を引く成田屋の十一世、十二世團十郎、そして十一代目海老蔵や、高麗屋の八世幸四郎、九代目幸四郎、そして七

代目染五郎、更に音羽屋の二世、三世、そして四代目松緑の各親子三代にわたる弁慶を今までに見比べることが出来たことです。因みに現幸四郎は弁慶を千百回以上演じています。

千年の佛千回の花役者

松本幸四郎 (千回記念の句)

顔見世や一子相伝の勸進帳

小泉芝雲

秋の舞踊では、三番叟物はじめ『紅葉狩』(更科姫と鬼女の二役演じ分けの面白さ)『忍夜恋曲者・将門』(滝夜叉姫の古風な踊りと古御所の屋体崩し場面)、『船弁慶』(前段の静御前と後段の知盛の亡霊の踊分けの面白さ)等があります。

昨年の歌舞伎座の十一月顔見世では柿葺落公演として大名題勢揃いの通し狂言『仮名手本忠臣蔵』が上演されており、更に翌師走にも同演目が若手役者中心で上演されました。

忠臣蔵にはこの他に真山青果作の実録物として九偏からなる『元禄忠臣蔵』が有り、特に上演回数が多いのは「御浜御殿綱豊卿」、「大石最後の日」です。

因みに忠臣蔵物(本伝、外伝、銘々伝を含む)は、師走になればどこかの劇場で必ず上演されます。

一力の秋の夜更くる千鳥足

佐藤吉之輔

最後に、歌舞伎が如何に一般大衆までに浸透しているかの事例として、各地方の土地の素人(主に農民)が祭礼や秋の収穫後に自ら歌舞伎を演じる地芝居が栄え、今日でも全国至る所で演じられて、俳句の季語「地芝居」(村芝居)として残っていることを記しておきます。

揚幕に少女が覗く村芝居

大隅徳保

笑ひ皺みせるお軽や村芝居

小泉芝雲

冬

「歌舞伎歳時記」最後は、冬の季語「顔見世」を中心に芝居を見てみず。江戸時代各座では、毎年十一月に役者と専属契約を結び、向う一年間の新しい座組を披露したことから、それが顔見世の原形となっています。しかし明治時代に松竹が歌舞伎全体を賄うようになると、その意味合いも変わり、今や昔ながらの仕来たりや古式ゆかしい行事として伝えられているのは師走の京都南座だけになっています。具体的に南座の「顔見世」行事を観てみますと、先ず十一月の中頃に竹矢来が生まれ、出演役者全員の名前が勘亭流の文字で書かれた「庵看板」(俗にまねき看板)が掛けられ、その下には上演演目の「絵看板」が並び、屋根の上には「櫓」が設けられ、「櫓」の先端には、「梵天」が立てられます。そうするともう京はすっかり歳末の風景となるのです。

澄む空や顔見世櫓上げており

水原秋桜子

南座に鬼女せりあがる年の暮

井口やよい

初日の幕開きは、昔の顔見世月の名残を残し十一月三十日とされています。(千鶴楽は十二月二六日頃) 其の初日の南座のロビーにはご鬘肩筋から出演の役者へ贈られた「竹馬」という飾り物が並べられます。そして初日から数日たって京都五花街の総見が行われます。昼の部の棧敷席には綺麗どころが、ずらりと揃い顔見世の華やいだ雰囲気や一段と盛り上げます。出演の役者は東西の名優・花形役者が揃う訳ですが、更にアクセントをつける意味で役者の襲名や追善等を絡め、それに相応しい役者の当たり狂言が上演されます。

従って出し物は冬という季節にマッチした狂言ばかりとはいきませんが、そこはやはり『忠臣蔵・九段目山科閑居の場』、『松浦の太鼓』、『土屋主税』等の忠臣蔵物や上方和事の代表的な『廓文章・吉田屋』(大晦日の大阪新町の廓話)、『大経師昔暦』、更に雪に絡む『奥州安達原・三段目』、『直侍(蕎麦屋と入谷寮)』、踊りでは、『鷺娘』、『雪女郎』等が多く演じられています。

「直侍」は、黙阿弥の代表作の一つ『天衣粉上野初花』の一部で、直侍こと片岡直次郎が入谷の寮で出養生している遊女三千歳を訪ねて行って別れを言うという情話を扱った場面ですが、ここで

使われる音楽の清元『忍逢春雪解（しのびあはるのゆきどけ）』（通称「三千歳」）の語り出しの詞章が何ともいえぬ季節特有の情緒たゞよう文句（「冴え返る」は春の季語）なので一寸記しておきます。

「冴え返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、上野の鐘の音も氷る、細き流れの幾曲り、末は田川へ入谷村」。

艶やかに紙衣着流す藤十郎

北村みよ子

顔見世をすませて消える雪女郎

村上武敏

最近三年間の南座の顔見世興行の内容を見ますと次の如く冬の寒さを吹き飛ばし正月気分を煽る賑やかな所謂顔見世狂言が多いようです。

平成二十三年は菊五郎、仁左衛門、我当、秀太郎等による『対面』、『源氏店』、『隅田川』、『実盛物語』、『元禄忠臣蔵・仙台屋敷』、平成二十四年は六代目勘九郎襲名公演として、勘九郎、七之助、藤十郎、團十郎（但し途中休演）、仁左衛門等による『吉田屋』、『忠臣蔵五・六段目』、『船弁慶』等が、そして昨年二十五年は二代目猿翁・四代目猿之助・九代目市川中車襲名興行として『仮名手本忠臣蔵・道行旅路の嫁入り』、『ちいさんばあさん』、『義経千本櫻・川連法眼館の場』等が上演されました。

しかしこの三年間で、人気役者であった十八世勘三郎、十二世團十郎が亡くなったことは誠に残念であり寂しい限りです。

風花や團十郎の楽屋入り

星野 椿

顔見世を見るため稼ぎ溜めしとか

高浜虚子

顔見世や見得極れる松嶋屋

藤井佳代子

顔見世や最辰役者の屋号飛ぶ

小泉芝雲

最後に、これまで述べてきた歌舞伎狂言を書き上げた有名な戯作者として近松門左衛門、鶴屋南北、河竹黙阿弥の名が挙げられますが、三人の忌日は、旧十一月二二日近松忌、旧十一月二七日南北忌、一月二二日黙阿弥忌となっており、俳句の冬の季語であることを記しておきます。

その頃の恋は死ぬこと近松忌

前内木耳

南北忌女の情けありがたく

松田ひろむ

声色は白浪物で黙阿弥忌

松田ひろむ

黙阿弥忌知らざあ言ってきかせやしよ

小泉芝雲

さて上記のとおり簡単ではありますが、四季ごとに演じられる代表的な歌舞伎狂言を配列致し、それに関連する俳句を付けてみました。

私にとって現在は歌舞伎を観ることは俳句を詠む一つの吟行の場所となっており、今まで以上に歌舞伎を広く深く観るようになったのではないかと思っております。

歌舞伎を観る楽しみが増えたと言っても良いくらいです。

特に歌舞伎観劇のついでに立ち寄る歌舞伎座ビル五階の庭園に植えられている草花を見ることも、四季を感じさせてくれる楽しみになっています。

春の枝垂れ桜、夏の合歓の花、秋のいろは紅葉、冬の上茶花等。

歌舞伎座の艶なる阿国櫻かな

花合歓や鏡花世界の玉三郎

木挽町路地に並びし小菊かな

風花の舞ふや歌舞伎座先人碑

小泉芝雲

以上

